

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2516 号

Anatomic resection for hepatocellular carcinoma - Prognostic impact assessed from recurrence treatment

肝細胞癌に対する系統的切除の意義 - 再発治療の重要性に着目した解析

皆川 雅明 (みながわ まさあき)

博士 (医学)

論文内容の要旨

肝細胞癌は担癌門脈領域への肝内転移がしばしば認められ、おいては門脈領域を切除する系統的肝切除が推奨されている。しかし、非系統的切除に対する優越性を示すエビデンスは乏しい。2004 年～2017 年の国内 2 施設の臨床データを用いて、5cm 以下の初発・小型肝細胞癌に対する系統的切除である亜区域切除と非系統的切除である部分切除を比較・検討した。250 例の対象患者のうち、術前の背景因子をプロペンシティ・マッチングで揃え、各群 67 例を解析した。5 年無再発生存率は系統的切除が 62%で、非系統的切除が 35%であり、有意に前者の方で再発率が低かった。しかし、5 年全生存率は各々 72%、78%と両者に差は認めなかった。一般的に、肝細胞癌は 5 年再発率が 70～80%と高率であり、再発治療の差によって生存率に影響を与えと考えられる。本研究において、各群 67 例中、局所治療である再肝切除とラジオ波焼灼療法を行った割合は、系統的切除では 10%、非系統的切除では 42%であった。本研究において、肝細胞癌に対する初回肝切除では、系統的切除を行うことで再発を抑制できることが示された。非系統的切除を行った場合でも、再発に対して局所治療(再肝切除・ラジオ波焼灼療法)を積極的に行うことで良好な予後が望めた。